The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中井履軒撰『荘子雕題』諸本について
Author(s)	藤居, 岳人
Citation	中国研究集刊. 1993, 13, p. 115-125
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61217
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中井履軒撰『荘子雕題』諸本について

藤居岳人

序

中井履軒（一七三二～一八一七）は、江戸時代後期の大阪の漢学者である。彼の『論語雕題』『孟子雕題』などの経書についての注釈、『史記雕題』『後漢書雕題』などの歴史書に関する注釈は高い評価を得ている。そもそも江戸時代の漢学者たちがこれらの書物を熟読しているのは当然なのであろうが、同時に彼らは儒教関係に限らず老荘思想関係の書物をもかなり読んでいたようである。履軒も同様であり、大阪大学所蔵懐徳堂文庫には中井履軒撰『荘子雕題』（履軒自筆本その他）が収められている。実際、履軒は荘子を高く評価していたようであり、『懐徳堂考』（西村天囚著・上巻は明治四十三年に下巻は明治四十四年に印行・昭和五十九年に懐徳堂友の会より復刻）には次のような記述が見える。

（鷦鷯）春斎乃ち問ふて曰く、……何を以て文章の準繩と為さんと、履軒曰く一部の論語のみ、……（春斎）曰く、……敢て其の次を問ふ、履軒曰く、孟子の文、其説論語に近し、……（春斎）曰く、敢て其次を問ふ、曰く、荘子のみ、……履軒曰く、此の書や浩々洋々、纎々微々、忽ち至大を極め、忽ち至小に入り、愈出でゝ愈奇、変幻快活、千状万態、模索す可からず、之を読めば人をして遺世の想あらしむ、而して後人の再び言ふを得ざる所の者なり、抑又以て次と為すべし、予れ初より論孟と並び称せざるなり、

（三十五章、履軒の文章論）

これは履軒が弟子の鷦鷯春斎の質問に答えた箇所であるが、履軒が荘子を『論語』や『孟子』に次いで重要視していることが察せられる。

そこで、本稿では履軒の『荘子雕題』を研究する前提として、まずそのテキストの諸問題について報告することにする。

一、懐徳堂文庫所蔵『荘子雕題』

懐徳堂文庫には現在、二種の『荘子雕題』のテキストが収められている。一つは中井履軒の自筆本であり、もう一種は履軒の高弟三村崑山（一七六一～一八二五）による写本（以下、『崑山本』と略称）である。それぞれの『荘子雕題』は下記の刊本に書き入れられたものである。まず、その書誌的事項を記す。

A．『履軒自筆本』（以下、『自筆本』と略称）

『荘子虞斎口義』十冊十巻。附新添荘子十論。宋林希逸。（附）李士表。寛文五年　風月庄左衛門刊。刊記「寛文五年乙巳歳孟秋吉祥日風月庄左衛門開板」。題簽「頭書　荘子　一（二冊目は二）」。大二七・五×一九・五糎。無界。四周単辺。八行一五字（第一冊）一六字（第二～十冊）。注双行。版心「荘子（巻数）（丁数）」。上下黒魚尾。四針眼訂法。中井積徳（号は履軒）自筆首書併修正訓点。印記「天生寄進」「大阪大学図書之印」「懐徳堂図書部」「天楽」。

B．『崑山本』

『荘子虞斎口義』十冊十巻。附新添荘子十論。宋林希逸。（附）李士表。以下、刊記や題簽などは『自筆本』と同じであるが若干異なる点があり、相違点のみ記す。大二七・七×一九・五糎。五針眼訂法。三村崑山手写中井履軒雕題伊藤介夫書入。印記「懐徳堂図書部」「有不為」「伊藤龢印」「介夫氏」「有不為斎」。

『和刻本漢籍分類目録』（長沢規矩也著・昭和五十一年・汲古書院）によると、寛文五年刊の『荘子虞斎口義』にはその後印本が存するとあるので、『自筆本』『崑山本』は寛文五年刊本かその後印本のいずれかと見られるが、現在の私にはそれを特定することはできない。

次に刊本への記入方法について述べる。

A．『自筆本』

ア　林希逸の注で問題となる部分に朱で傍線（点をう

つ場合もある）を引く。そして、その上の余白に墨筆で「雕題」を記す。問題となる部分に、朱で傍線を引かずに「雕題」を記す場合もある。逆に、傍線のみで「雕題」のないものも多い。

イ　「雕題」は、本文内の余白や下の欄外に書かれている場合もある。

ウ　「雕題」を記す余白がなくなった場合は、朱で「△」「○」「・」などの記号を書き、空いている余白に同じ記号を記し、その続きを書く。

エ　本文及び注の衍文・衍字はその部分を朱で四角く囲む。

オ　注の誤字は、その誤字の右に墨や朱で圏点を打ち（または括弧でくくり）、欄外に正しい字を墨や朱で書き込む。

カ　人名・書名に朱引がある。

B．『崑山本』

ほぼ忠実に『自筆本』の体裁を踏襲している。文字も楷書で非常に読み易いが、本文の人名・書名における朱引は省かれている。また、巻端に伊藤雪香（字は介夫・一八三三～一九一二）の書後一篇があり、それには、

書中の墨書朱抹は皆雕題に係わる、余見る所有れば則ち或いは藍を以て書き、或いは和案（ママ）と署す、其れ前人の説を引き、和の補ふ所に係わるは、必ず其の書名姓氏を書き、荘子雕題と相淆乱せざることを欲するなり、

とある。つまり『崑山本』は、大阪大学懐徳堂文庫に収められるまでは伊藤雪香の蔵書であり（蔵書印がある）、彼が「雕題」の他に自説や他の注釈者の説を書き込んでいるのである。（自説の場合は「和按」（ママ）、その他の場合は「陸方壺曰」「林雲銘曰」などと記している。）

また、同じく伊藤雪香の書後に、

右荘子林希逸口義十巻、崑山三村先生の旧蔵本たり、……辛己（明治十四年に当たる）之春、余は大阪之市において此書及び史記世説を得、並びに履軒先生の雕題を載す、皆崑山の手書に係わる、惜むらくは、此書巻五より八に至る合せて四巻の雕題闕く、因りて並河君蔵本を借りて補写す、是において荘子雕題始めて完し、

とあって、三村家旧蔵本を伊藤雪香が手に入れたときは巻五から巻八に至る四巻が欠落していたらしい。そ

れを「並河君蔵本」を借りて補写し、ようやく完本となったとある。『崑山本』を見ると確かに巻五から巻八は、他の巻と比べて異なった特徴をもっている。例えば、他の巻では「雕題」を記す場合、匡郭の上から書かれているものが普通である。ところが、巻五から巻八は、ほとんど匡郭の下から「雕題」が書かれているのである。また、筆勢も異なっている。

ところで、『崑山本』で疑問となるのは「並河君蔵本」とは一体どのようなテキストであったのかという点である。そこで検討したところ、次のような特徴を見出した。

① 「雕題」の体裁は『自筆本』とほぼ同じである。例えば、「雕題」の書かれている位置や林希逸の注に施された朱線もほぼ一致する。また、「雕題」を書くスペースがなくなった場合、朱の「○」「△」などで余白に続きを導く手法が『自筆本』で見られるが、『崑山本』巻五から巻八でも同様である（巻五の三十一葉裏・巻六の二葉表など）。

② 『自筆本』が原因と見られる誤りがある。例えば、『崑山本』巻五の二十七葉裏に「主只處主客之主……」とあるが、「處」は「是」の誤りである。ただ、『自筆本』を見ると一度書かれた文字（読解不能）の上から「是」と書かれており、非常に読みにくく、「處」とも読める。また、「雕題」文の順序は『自筆本』と同じであるが、「雕題」を余白に導く記号（「○」「△」など）が脱落しているためにそのまま見ていては意味が通らなくなっている箇所も見られる（巻六の五十葉表・巻七の二十三葉裏～二十四葉表）。

以上のような理由から「並河君蔵本」とは『自筆本』あるいはその系統のテキストとほぼ推定できる。

『懐徳堂考』によると、明治二年に懐徳堂が閉校されてから、色々曲折はあるが、中井桐園は好徳学院を江戸堀南通に開き、並河寒泉は女婿淡輪三郎の南江戸堀の控家に住んだという。つまり、明治初期には中井家並河家ともに大阪の南江戸堀に住んでいたようである。桐園の死後、その子木菟麻呂は東京に移り住むが、蔵書はそのまま南江戸堀にあったのかもしれない。伊藤雪香は、若いころ、教えを寒泉に請うたらしく、その関係から江戸堀にあった中井家旧蔵書から『自筆本』

（書後では「並河君蔵本」）を借りたのではなかろうか。

二、『無求備斎老荘列三子集成補編』所収『荘子雕題』

『荘子雕題』は、これまで未刊本であったので多くの研究者の眼に触れる機会は少なかった。しかし、台湾から発行された『無求備斎老荘列三子集成補編』（厳霊峯編輯・民国七十一年・成文出版社）第四十七冊に『荘子雕題』が収められているのである。その表題には「日本明治十一年寺町雅文手抄本　荘子雕題　十巻　中井積徳撰」とある。すなわち、寺町雅文(未詳)が手写した『荘子雕題』を影印したものである。その『荘子雕題』の巻末には寺町雅文による書後があり、それによると、

履軒翁は林希逸口義に拠りて荘の義を解す、我が南州先生嘗て其の手筆本に就きて、手らこれを浄写す、編じて雕題十巻と為し、以て閲覧に便す、実に希有の珍本たり、……乃ち借りて一本を謄し、以て読荘子訣と為すと云ふ、

明治戊戌夏六月初四、後学　寺町雅文識す

とある。すなわち、寺町雅文なる人物は、明治期の大阪の漢学者近藤南州（名は元粋・一八五〇～一九二二）の弟子であった。そして、南州が履軒の『荘子雕題』を見て手写した写本が当時存在したらしい（後述）。その写本をさらに弟子の寺町雅文が南州から借りて手写したものが厳霊峯の無求備斎に収められたようなのである。

ところでこの『無求備斎老荘列三子集成』所収の『荘子雕題』（以下、『無求備斎本』と略称）は、表題には「明治十一年寺町雅文手抄本」とあるが、その書後の日付を見ると「明治戊戌夏六月」とある。つまり、明治三十一年に寺町が書後を書いたということだから表題の日付は恐らく誤りであろう。

この『無求備斎本』の体裁は以下の通り。

ア　まず篇名を挙げ、次に改行して章ごとに〇〇節（章の冒頭の二文字を取ることが多い）とする。

イ　さらに改行して問題となる部分を抜き出す。その部分が林希逸の注の場合は「注」と書き入れた上で問題部分を抜き出す。

ウ　抜き出された問題部分から一字分を空けて「雕題」を記す。二行目から「雕題」は、一格を低くして記す。

この『無求備斎本』で問題となるのは、寺町雅文の書後に「我が南州先生嘗て其の手筆本に就きて、手らこれを浄写す」とあることから、南州がどのような『荘子雕題』のテキストを見て手写したのかという点である。彼が弟子たちに閲覧させたという『荘子雕題』の写本が存すれば『自筆本』と対照することができるが、散逸してしまっているのでそれはできない。そこで間接的ではあるが『自筆本』と『無求備斎本』とを比較することによってそのあたりの問題を探ってみることにする。

まず、『無求備斎本』が『自筆本』と相違している点を以下に挙げる。（調査したのは内篇の部分のみ）

ア　漢字は、異体字を用いているものが見られる。

イ　大意に影響はないが、文字を変えているものがある。

例えば、『自筆本』の「大」を「太」に、「曽」を「嘗」に、「註」を「注」に変えているものなど。

ウ　大意に影響はないが、『自筆本』の記述を省略しているものがある。

例えば、『自筆本』巻一の四十八葉表では「『何謂和之以天倪曰』八字衍文」とあるが、『無求備斎本』三十六頁では上に問題となる部分が引用してあるため「是八字衍文」とあるのみ。

エ　『自筆本』でなされている、林注の誤字に対する指摘は脱落している。

オ　本文あるいは注の問題となる部分のみを抜き出している関係上、「雕題」の並び方が異なっている部分がある。

例えば、『自筆本』の場合は本文と林注とに対して別々に「雕題」が書かれているものがある。そこでそれらを一項目にまとめると各「雕題」の順序が入れ代わってしまう。

これら以外に、明らかに『無求備斎本』が誤っている例も何例か見られた。

ア　文字を誤ったもの。

例えば、『自筆本』の「亦是泛辭常語」を「亦是泛辞當語」（十八頁）に、「固有天理渾然作解」

を「同有天理渾然作解」〔二十頁〕と誤っているものなど。

イ　語順を誤ったもの。

例えば、『自筆本』の「只是大重鄭」を「只是大鄭重」〔十九頁〕に、「然不能説明以教其子」を「然不能明説以教其子」〔二十八頁〕と誤ったものなど。

ウ　「雕題」が脱落している。

例えば、『自筆本』巻一の三十四葉表の頭書に対する批評「謬中之謬尤甚者」が脱落〔『無求備斎本』では二十八頁相当〕。『自筆本』巻一の四十五葉裏「大覚謂死大夢謂人世」が脱落〔『無求備斎本』では三十五頁相当〕。

エ　『自筆本』にない文が挿入されている。

例えば、『無求備斎本』一頁「老子指荘子」、同三十七頁「注夜来謬甚」は『自筆本』には見えない。その他『無求備斎本』に「注非」とあるものは、履軒の意図を表してはいるものの『自筆本』には見えないものがほとんどである。

以上のように、『無求備斎本』は大筋で信用できるものの、写本に特有の誤りもかなり認められることが分かった。

ところで、近藤南州がどのような『荘子雕題』を参考にしたのかという点について、興味深い例を『無求備斎本』に発見した。まず、第一例は『無求備斎本』の二十四頁である。そこでは「以指節」として以下の「雕題」を引いている。

是章言以我之是規彼之非則彼必不服、莫若以我之非指喩彼之非而規之、彼則悦服也

この文章を虚心に読めば「以我之是、規彼之非」と「以我之非、喩彼之非」とが対句をなすのが自然である。すなわち、引用文中の「指」は衍字の可能性が高い。寺町雅文も「指」の右側に「恐衍文」と付け加えている。これは近藤南州の誤写であるが、なぜ彼がこのような誤写をしたのか。試みに『自筆本』を見てみると、引用部分は巻一の二十八葉表の書脳（書物の綴じ目に近い方の余白部分）に書かれている。そのすぐ横に頭書の注があり、そこに「切要無過於情」という部分がある。その中の「情」の字に履軒は圏点を施し、「指」と改めている。そして、改めた「指」字が、偶然にも書脳に書かれた「雕題」の「非」字と「喩」字との間

に書かれているのである。

もう一例は『無求備斎本』の八十三頁に見える。それは「古之真人不節」の本文「不求所終」の林注「即所謂原始反終云云」に対する「雕題」であり、以下のようになっている。

不求終、与反終意相反、且可也、与易語意皆不同、勿相援据可也、

この例では、前者の「可也」が衍文であり、「且与易語意皆不同」と続くのが正しい。ここでなぜ南州が誤写したのかを考えると、これも『自筆本』の体裁がその原因と見られるのである。『自筆本』巻三の三葉裏を見ると、まず、履軒はこの「雕題」を頭注上部の狭い部分から書き始め（「且」字まで）、頭注のなくなった所から匡郭下の余白に続けて書いている（「据」字まで）。そして、改行して最後の「可也」を上層に書いているのである。つまり、「且」の下に匡郭の線が入っているために「且」の後に「与易語意」「可也」のどちらが続くのか一見はっきりしない体裁になっている。恐らく南州もこの体裁に惑わされて誤写したものと考えられる。

以上、南州が誤写した例から察するに彼は確実に『自筆本』を見ていたと言える。

『大阪人物誌』（石田誠太郎著・昭和四十九年・臨川書店。昭和二年・石田文庫刊の復刻版）によると、南州は嘉永三年に伊予松山に生まれ、二十七才の時（明治十年）に来阪、猶興書院を建てて生徒に教授したという。また、『無求備斎本』には寺町雅文の書後の日付が「明治戊戌（明治三十一年）夏六月」とあることから、明治十年から明治三十一年の間に南州が『自筆本』に基づいて『荘子雕題』を手写したと考えられる。そして、寺町雅文自身は「以指節」の項における「恐衍文」の語から推測すると『自筆本』は見ていなかったことも察せられる。そのうえ、『無求備斎本』では問題となる部分の引用文にも誤写があり、雅文が欄外で訂正している箇所も存する（『無求備斎本』九十八頁「吾時与汝其夢未如覚者邪」の欄外に雅文が「『如』（字は）、『始』（字の）誤」としている例など）。以上から南州が弟子たちに供した『荘子雕題』のテキストは、問題となる部分と「雕題」とのみを手写したものであったと考えられる。

近藤南州は儒学のみにとらわれずまことに広範囲の分野に関心を抱いていたようである。それは数多くの著述にも表れている。その南州旧蔵書の一部が現在大阪天満宮御文庫に収められている。『大阪天満宮御文庫漢籍分類目録』（長沢規矩也等編・昭和五十二年・大阪天満宮）によれば、中井履軒の「雕題」関係の書物もいくつか蔵されている（寺門日出男「大阪天満宮御文庫所蔵『雕題』（中井履軒撰）諸本について」（『中国研究集刊』月号・一九九一年）を参照されたい）。もっとも、残念ながらその蔵書の中に『荘子雕題』は見られない。しかし、その他『荘子』関係の書物が若干見られる。その中に近藤南州手校手識本『荘子虞斎口義』（以下、『天満宮本』と略称）が存するが、南州が『自筆本』を手写した状況を窺う手掛かりが得られるかもしれないと考えたので調査してみた。

三、大阪天満宮御文庫所蔵『荘子虞斎口義』

その書誌的事項を見ると、寛文五年風月庄左衛門開版の刊本で『崑山本』と同じテキストを用いていた。ただ、印記は「猶興書院図書」「近藤氏蔵」「蛍雪軒珍蔵」となっている。この『天満宮本』には南州によるかなりの書き入れが見られる。その書き入れは諸注釈家の説を抜き出した上に自説を述べたものであるが、注釈家説の半数以上が「雕題」を抜き出したものである。『荘子』に関して言えば南州はかなり「雕題」の説に傾倒していたようである。以下、『天満宮本』の「雕題」に関する書き入れの特徴を『自筆本』『無求備斎本』と比較した上で列挙する。（調査したのは内篇の部分のみ）

ア　『無求備斎本』に見られた誤写が『天満宮本』にも多く見られる。

例えば、『無求備斎本』で見られた「雕題」後の「注非」の語が『天満宮本』でも見られた（「注非」の語がないものもある）。

イ　『無求備斎本』では完全に脱落していた『自筆本』の誤字の訂正が『天満宮本』には見られる（ただし、履軒の名は冠せられていない）。

ウ　『無求備斎本』は誤っていないにもかかわらず、『天満宮本』の文字が誤脱している。

例えば、『天満宮本』巻一の二十五葉表（『無求備斎本』二十二頁）の「雕題」「以天下学者議論」において「議論」が脱落している例など。

エ　『無求備斎本』では誤っている箇所が『天満宮本』では改められている。

例えば、前述した『無求備斎本』二十四頁の「指」が衍字である例は改められている。また、『自筆本』巻一の三十四葉表「謬中之謬尤甚者」は、『無求備斎本では脱落しているが『天満宮本』には見られる。

エについては、さらに興味深い例が見える。『無求備斎本』四十五頁「適来節」の「雕題」に「遂理死生之理也」とあるが、『自筆本』によると「遂論死生之理也」が正しい。そして、『天満宮本』巻二の七葉裏にもこの箇所が引かれ、一度は「遂理死生之理也」と書かれているが、上の「理」を圏点で消して「論」に改めている例が見られる。また、『天満宮本』巻三の二十五葉表「応帝王篇」冒頭に「雕題、是可以応酬於帝王之語矣……」と「雕題」という文字が記されており、同じ葉の後部に「中曰……」において全く同じ内容の「雕題」が見える。「中曰」で引かれている説は、他の用例から見ても明らかに履軒の説である。また、『天満宮本』の巻末を見ると、巻四から巻九にかけて南州がその巻を読了した年月日を朱で記している。例えば、巻四の巻末を見ると、

大正八年己未一月二十五日　南州読過時年七十
己丑（明治二十二年に当たる）十一月念六
三十一年前也
南州外史読過

とある。同様に巻末の年月日のみを記すと次のようになっている。以下、括弧内の年代は藤居の注記である。

巻五　庚寅（明治二十三年）一月廿三日
巻六　庚寅（明治二十三年）二月
丙申（明治二十九年）秋十月五日夜
庚申（大正九年）三月十一日
巻七　庚申（大正九年）十月
庚寅（明治二十三年）三月十八日
巻八　辛酉（大正十年）五月十七日
巻九　辛酉（大正十年）十一月二十一夜

これらの日付を見ると、南州が『天満宮本』を読んだ

のはほぼ二つの時期である。第一は明治二十二年十一月から明治二十三年三月にかけての時期。恐らくこの時期前後に『自筆本』を手写し、弟子たちに供し始めたのではないだろうか。そして、この時期は前記の明治十年から明治三十一年にかけての時期とも重なり合っている。さらに、第二は大正八年一月から大正十年十一月にかけての時期。南州の書き入れが巻九までで巻十に至っていないのは、巻九を読了したすぐ後の大正十一年一月に彼が没してしまったためであり、彼が没する間際まで精力的に学問に勤しんでいたことがその日付によって窺える。

近藤南州らが活躍していた当時、懐徳堂は明治二年に閉鎖されたままであった。そして、大正五年に懐徳堂が重建されるまでにはまだ時間があった。中井木菟麻呂（中井履軒の曽孫）らによって収集された懐徳堂及び水哉館の遺書遺物は昭和八年から十四年にかけて懐徳堂に寄進された。それまでかなりの懐徳堂関係の蔵書が散逸したようである。ただ、前述したように履軒自筆の『荘子雕題』は大阪に存したらしい。それを閲覧することが近藤南州にも可能であり、『自筆本』をもとに手写された写本がさらに弟子たちに供せられ、読み継がれていったと考えられる。

結

『無求備斎本』は、近藤南州の弟子、寺町雅文が手写したものを影印したものである。今後、これは『荘子雕題』のテキストとして流布本となってゆくだろう。しかし、『自筆本』に基づくとは言え、これまで見てきたように写本を影印したものであることに起因する問題が残っている。『無求備斎本』によって『荘子雕題』を読む場合は、その点を注意しなければならないだろう。幸い大阪大学懐徳堂文庫では『自筆本』を直接見ることができる。この『自筆本』に基づいて履軒の荘子観を探る試みは、また稿を改めて論じることにする。

［付記］本稿は、市川国際奨学財団の研究助成金による「中国における「百科全書」の総合的研究」の研究成果の一部である。